

日本における葬礼相撲の一形態

著者	宇佐美 隆憲
著者別名	USAMI Takanori
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	31
ページ	57(132)-70(119)
発行年	1996
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010098/

日本における葬礼相撲の一形態

宇佐美 隆 憲

問題の所在

日本における相撲の系譜は、これまで二つの系統によって説明されてきた。一つは、南方との結びつきが強いと考えられている「豊穡儀礼」の系統であり¹⁾、他の一つは、北方との結びつきで考えられている「葬送儀礼」の系統である²⁾。このうち豊穡儀礼と結びつく相撲については、現在でも日本各地に伝承されていることが確認されている。しかし、葬送儀礼と結びつく相撲に関しては、現在その形を見つけ出すことはできないといわれている³⁾。

本稿がこれから問題とするのは、後者の葬礼相撲の系統である。葬礼相撲をどのように定義するのかという問題とも関わってくるが、少なくとも葬送的な意味を持つ相撲を葬礼相撲とするなら、日本においてそのような相撲の存在を確認することはできないのであろうか。本稿では日本における葬礼相撲のバリエーションを考えていくための一つの試みとして、地藏信仰と関わる相撲を取り上げる。この相撲の分析を通して、日本における葬礼相撲の一つの形態を明らかにすることを目的としている。

1. 葬礼相撲の定義

日本において相撲と葬送儀礼の関係を初めて問題にしたのは、考古学者の森浩一と民族学者の大林太良の両氏であった。彼らは『シンポジウム日本の神話4 日向神話』の中の対談において、『日本書紀』に登場する野見宿禰と当麻蹶速による相撲が葬礼相撲の系統ではないかという指摘をしたのである。彼らの指摘を明確に知る上でも、その発言部分を引いておこう⁴⁾。

「森 高句麗の古墳壁画に相撲をしているのが3例あります。どうもふんどしをした相撲とりのスタイルが、高句麗の場合、お葬式の儀礼と関係があるように思うのです。そうすると、『皇極紀』の相撲をとらせたという文献も、あそこを読んでみたらあの前に、百済の大使の子と従者が死んでいるのです。そのすぐ後に健児に相撲をとらせたと出てくるのです。ひょっとしたら相撲がそういうお葬式の儀礼と結びついているのではないか。そうすればさきほどの海幸のスタイルのあとで、身を汚すのだということが、漁民集団などの日常スタイルではなくて、葬送儀礼と結びついた特殊なスタイルであると考えることができるわけです。……『垂仁記』にある野見宿禰と当麻蹶速が相撲をしたという記事です。野見宿禰というのは土師氏の祖ですね。土師氏は古墳をつくる集団です。当麻氏のほうも、土師氏ほどでなくてもお葬式に関係のある集団です。そうすると、どちらもお葬式や古墳づくりなどに関係のある集団です。それが相撲で事を決しているというのは、なかなか示唆にとんでいる。……

大林 そうすると頭に浮かぶのは、葬式のときに相撲をする習俗が、内陸アジアの遊牧民に非常に多いことです。日本と内陸アジアとの真中に入る高句麗とはくつつくのですが、従来隼人がインドネシア系と思われているのとうまくくつつきませんね。」

日本の相撲の系譜の一つに葬送儀礼との関係が考えられるとした、この指摘は、その後の相撲研究に新たな方向性を与えることになった。つまり、相撲の系譜がそれまで豊穡儀礼との関

係一辺倒で語られていた事に対する根本的な見直しを迫るような衝撃を与えたからである。

このような新しい論点が提出されたことを受けて、その後、葬礼相撲の資料的な裏付けをおこなってきたのはスポーツ人類学者の寒川恒夫であった。寒川は、日本において葬礼相撲が存在していた可能性を考古学的な史料と日本内外の葬送と関わる相撲の事例の収集を通して実証的研究を進めてきたのである⁵⁾。その結果、以下のような指摘がされたのである。

1. 百済王の甥である翹岐の従者と子供が5月に続けて亡くなるが、その2ヵ月後の7月に翹岐のために健児が相撲を取っている。
2. 宿禰は殉死に変わる葬法として埴輪の埋葬を進言することで葬礼集団の統率者となった。
3. 埴輪から力士を形取った埴輪やそれを描いた須恵器が関東から九州までの地域で出土している。
4. 人の死に際して相撲を取るという習俗は日本の周辺地域も含めて存在していた可能性が高い。

以上の4点において、葬送儀礼との関係で相撲が取られたと論じられているのである。葬礼相撲がどのような機会に取られるのかという点については、2と3の指摘からでは明らかにすることができない。しかし、野見宿禰と大麻蹶速の相撲も含めて、1と4の指摘は、葬礼相撲がどのような場面でおこなわれてきたのかを知ることができる。そこで、寒川の提示した葬礼相撲に関する資料を中心にしながら、葬礼相撲と呼ばれる相撲の特徴を明らかにしていこう⁶⁾。

最初に日本に痕跡的ながら残されているという葬礼相撲について、寒川は次のような見解を取っている。すなわち、貴人の死に際して相撲を取ったという痕跡は、『日本書紀』皇極天皇元年7月の条に載った相撲記事にみられる。百済から政治亡命していた百済王の甥に当たる翹岐は、5月21日と22日に相継いで従者と子供を失い、その2ヵ月後の7月21日に翹岐のために、

天皇が健児に相撲を取らせており、これが葬礼相撲であったと考えたわけである。つまり、貴人もしくはその関係者が亡なった場合に、それほど時をおかずに、相撲を取るという習俗があったのである。この様な習俗は、日本よりもむしろ海外において顕著にみられる。

そこで次に、日本以外の事例についても概観してみよう⁷⁾。

例えば、インドのクオレン・ナガ族の相撲は、死者祭と関係しているという。「死者が出ると、遺体は生前の家の前に穴を掘って埋めるが、死者の霊は毎年1月末におこなうカティ・カシャム祭までは生前の家にとどまり、祭を機会に母なる大地を含めたこの世の一切のものとかわりを捨てるとされる。祭は10日間におよび、その最終日に、遺体の髪をすべて切り落とし、沐浴を施し、身づくろいをさせる。このとき、若者たちは村の外に出て、石持ち上げ、幅跳びと並んで相撲をとり、すむと村の中へ戻る」⁸⁾と報告されている。

またウィロン・ナガ族にも年中行事である死者祭に未婚の男性によって相撲が取られている。

このような死者祭に相撲を取る習俗はトンガでもみられる。サモアにおいては、葬式の時におこなわれる競技の一つに相撲があるという。フィジーでは王の死や少年の割礼に際して相撲がおこなわれている。

さらに、中国においても葬礼と関係する相撲が見られる。トン族の一部では、祖先祭祀と関係を持つ相撲が取られ⁹⁾、また、雲南に住む彝族では異常に多くの死者がでたときには相撲をとるという。

このような事例以外にも、カール・モイリが示したように中央アジアには、葬送儀礼と関わる多くの相撲の存在が確認できるという¹⁰⁾。

さて、以上の事例から、葬礼相撲は次のように定義することができる。すなわち、基本的に葬礼相撲は、死者が出た場合に、それを弔うために相撲を取る行為であるが、死者祭のような年中行事もまた葬礼相撲の範疇に属する。

それでは以下、日本の事例について検討して

いくことにしたい。

2. 日吉村の事例

1) 調査地概況

日吉村は、明治23年の市制町村制が実施されることによって、上鍵山、下鍵山、日向谷、上大野、父野川の5ヶ村が1村に統一されて出来上がった村である。

地理的には、愛媛県宇和島市からは約35キロ離れた東北部に位置しており、高知県境にある北宇和島郡の最北端にある。東南部は高知県幡多郡十和村、東は高知県高岡郡檮原町、また西北には東宇和郡城川町、西部は広見町、さらに西南は松野町に隣接している。いずれも高峻の分水嶺を村境としているが、広見町と城川町の間がわずかに平坦部で接続している。このような状況からも理解できるように、日吉村は傾斜地が大部分を占め、約90パーセント以上が山林で、文字どおりの山村である。

明治以前の生業は、ほとんどが農業であった。しかし、第二次世界大戦後からは、地の利を生かした林業も活発化されるようになり、現在では農林業が産業の中心である。

人口については、現在（平成7年8月）、2095人（男1012人、女1083人）で、世帯数は757戸である。人口と世帯数の変化をみると、例えば昭和50年には人口2609人世帯数が724戸であった。この推移を見ると人口そのものは減少しているが、世帯数は、かえって現在の方が多い¹⁾。このことから一戸当たりの家族構成人数が大幅に減少していることがわかる。

さて、歴史的には、日吉村は徳川時代である慶長19（1614）年に伊達秀宗の領地となり、その後、明暦3（1657）年夏に秀宗の5男の宗純に3万石を分地する事で吉田領となった。特筆される吉田藩の出来事は、「吉田騒動」として今でもこの地で語り継がれている「武左衛門を中心とする農民一揆」である。寛政5（1793）年2月に吉田領内83ヶ村の農民を率いて、藩の苛政に抵抗し、その改革に成功したが、自らは、その犠牲となった農民一揆の頭領である武左衛

門が当時の上大野村の人であった。武左衛門は2年後の寛政7年に吉田藩の探索によって、打ち首となり、それは村人の手によって上大野村の寺に埋葬され石碑を建立して供養した。しかし、吉田藩はこの石碑を打ち砕き、今後、武左衛門に対する祭典等の行事一切を厳禁する旨を申し渡した。村人たちは藩の通達にも関わらず、上大野で施餓鬼の日には、一席の念仏が、単に菩薩への供養であるという名目の下、今日に至るまで続けられてきたのである。

このような信仰心は、次に取り上げる「六地藏奉納相撲」を続けさせていることと無縁ではないと考えられる。

2) 「六地藏奉納相撲」の実際

六地藏奉納相撲が、いったいどのような意味を持つのかを明確にするために、平成7年の参与観察に基づき、その概要を述べておこう。

六地藏奉納相撲は、地蔵盆でもある「孟蘭盆」の8月24日におこなわれる。土俵は下鍵山の市街地に続く山麓の小高い場所である「武左衛門広場」の西側にある。武左衛門広場は、この地の中心的神社である「日吉神社」の境内地にあり、社殿はこの広場よりも上の山腹に位置している。武左衛門広場には、六体の地蔵尊が安置されている地蔵尊堂の他に、明治以降、日吉村の発展に貢献した井谷正命氏の顕徳碑も建てられている。また地蔵尊堂と並んで武左衛門の顕彰碑、さらには戦没者の慰霊碑が建立されている。

六地藏奉納相撲に関しては、六地藏奉納相撲実行委員会によって事前の準備も含めて、運営されることになる。「孟蘭盆会・六地藏奉納相撲大会」のプログラムによると、主催は下鍵山部落、日吉村商工会、日吉村公民館であり、後援が日吉村、日吉村教育委員会、日吉村体育協会、野村町体育協会となっている。土俵の整備は、8月16日におこなわれたが、これを担当したのは下鍵山の基本的社会組織の一つである十人組の組長が10人と商工会の役員であった。この作業が終わると当日まで目立った仕事は無い。

さて、相撲大会の当日は、早朝8時より、地藏堂周辺の掃除やテント張りがはじまる。この準備には、組長10人、寺総代3人、区長1人、さらに年間13回ある神仏関連の行事を手伝う当番の老女が2人加わり、合計16名が参加する。この行事が仏事と関係するため、宮関係の役員はこの準備に関与しないのである。準備は、正午近くまで続けられた(写真1参照)。

午後1時30分から、念仏をあげるために地藏尊堂には、泉福山宗楽寺の住職と区長、副区長、組長、寺総代が着席する。また、地藏尊堂の斜め左後方には、念仏を唱えるために、子供5名と大人7名が待機する。子供は太鼓を、大人は鐘を担当する。子供たちは特別の衣装を身にまとい、また大人は黒のネクタイという仏事の時の出で立ちとなる(写真2参照)。

時間になると、地藏尊堂の外にいる子供5名と大人7名によって念仏が始まるが、それに併せて、地藏尊堂の中では住職による法要がはじまる。住職はお経を唱えながらそれぞれの地藏に膳を出す。住職による法要が終わると、念仏も終了し、最後に同席した人々による焼香がおこなわれる(写真3参照)。

20分ほどで法要が終わると、その場で1時間ほど直会がおこなわれた。法要に出席した人々は、三々五々散会するが、その1時間後には、奉納相撲の最終準備のため、区長をはじめとする関係者が武左衛門広場に集合するのである。

16時30分から相撲がはじまる。開会にあたって、式が執り行われ、下鍵山の区長が勸進元として挨拶にたつ。言い伝えによれば「33結びの相撲を奉納する」と言われ、33番以上の相撲が取られるのである。最初は子供相撲で、保育園児によって男女関係なく相撲が取られ、その後17時頃から小学生による相撲が約1時間あまりおこなわれるのである(写真4参照)。小学生による相撲が終わる18時過ぎには、一旦、休憩が入り、次ぎに六つの分館による対抗試合が始まる。6分館とは、父野川下、父野川上、上大野、下鍵山、上鍵山、日向谷にある公民館である。それぞれのチームは、3名の選手によって編成

されており、選手となるためには、日吉村内に居住し、各分館長の推薦によって、その分館からの出場が適当であると認められた者でなくてはならない。19時までには全ての試合が終わり、表彰式に入る。ここまでは、日吉村に籍のある人たちによって取られる相撲であるが、19時過ぎから始まる試合は、近隣町村からの選手が出場する。

表彰式終了後に、土俵の整備が行われる。整備が終わると各町村の選手たちによって土俵上で四股が交代で踏まれ、それ以外にも各選手は準備体操をおこなう。19時30分より、町村対抗試合の開会式が始まる。ここでは、勸進元が村長となり、開会の挨拶をするのである。平成7年の大会では、10チームが参加した。試合は5チームずつ、2つのグループに分けられ、それぞれでリーグ戦がおこなわれた。各リーグ戦の優勝者は最終的に決勝戦で戦うこととなり、優勝チームを決めたのである。

優勝チームが決まると、町村対抗試合の表彰式がおこなわれる。表彰式が終わると、次ぎに個人戦が始まる。開始時間は21時30分からであった。それまで出場していた各チームの選手はもとより、個人戦に向けての単独出場も可能である。まずは、「小五人」と呼ばれる5人抜きがおこなわれる。この結果をもとにして「日吉相撲クラブ」の関係者が中心となり小結、関脇、大関を2人ずつ、6人を選出する。この6人によって「役相撲」がおこなわれ、また、酒と力飯(おにぎり)が交換される(写真5参照)。次に中五人、大五人の順で試合がすすめられる。最後に「納めの相撲」として、力士がお互いに組み合ったところで、土俵回りにいる力士達が組み合った力士をおさえ、行司が「この相撲は明年までの預かりとする」ということを述べることによって、全行事が終了する(写真6参照)。

22時55分から、かたづけが始まり、とりあえず15分ほどで一通りの整理をすませ、残りは、明日の朝8時からすべての片づけをおこなうことになる。23時15分頃から日吉神社の参道を挟んで土俵とは反対側にある明星草庵において、

関係者ならびに近隣に居住する力士の一部が残
り、直会がおこなわれ、1時間ほどで終了する。

3) 地藏供養としての相撲

これまで述べてきた相撲大会は、開催主旨か
らも窺えるように、「六地藏への奉納」という
意味を持っている。そこで、地藏尊に相撲を奉
納するという行為を行事の構造などを手がかり
として、分析することにした。

まず、この六地藏の製作年代についてである
が、地藏には宝暦5(1775)年とあり、吉田藩
がこの地を治めていた時代のものであることが
わかる。彫刻師は不明であるが、「安馬屋の商号
で酒造業を営んでいた関原家の祖先の関原権左
衛門や井谷太郎氏の祖先であろうと思われる井
谷興十郎が中心になり、十数名の篤志家の協力
で吉田藩の国土安全、天下泰平を願って建立さ
れたものと思われる」¹²⁾といわれている。この
ことからすると、現在ある六地藏への奉納相撲
が建立当初から始まっていたとするなら、吉田
藩がこの地を治めていた頃になるが、武左右衛
門による一揆の前ということになる。ところで、
現在六地藏が安置されている地藏尊堂は、元は
下鍵山の中心地近くにあったが、昭和10(1935)
年に下鍵山市街地で大火があり、それをきっか
けとして六地藏は現在の場所に移転されたので
ある。移転に際して、下鍵山が管理する木を切り
だし、住民の寄付や奉仕作業によって建立し
たのであった。このことから理解できるように、
六地藏は下鍵山地区の管理下にあるとみて
よいであろう。

さて、相撲が六地藏に奉納されるに当たり、
これと一対の関係にある念仏についても注目し
ておく必要がある。というのも、この相撲が葬
送と関わるとするなら、当然そこでおこなわれ
る儀礼は葬送儀礼的な要素を多分に含んだ行為
であると考えられるからである。そこで相撲が
おこなわれる8月24日の念仏が誰に対してあげ
られたものなのかをみると、2度の焼香から二
つの対象があったことがわかる。一つは六地藏
に対して、もう一つは武左衛門に対してであ

った。念仏は「道行き」「庭念仏」「くずし」「も
ん返し」の4パートから構成される。鐘と太鼓
をならしながら詠われる「くどき」には、「道
行き」「庭念仏」「くずし」において、それぞれ
詠われる内容が異なるが、念仏をあげる対象に
よって何を何回詠うのかが決まっている。「庭
念仏」と「くずし」を一回連続で通して詠うこ
とを「1庭」と表現するが、六地藏には25庭の
念仏を、また武左衛門には10庭の念仏をあげる
ことになっている。もちろん念仏はお盆にあげ
られるものである。そこで、お盆の念仏の順序
ならびにその回数を見ると次のようになっている¹³⁾。

1. 檀家の祖先 52庭 (最初に「道行き」が
おこなわれる)
2. 三界万霊 10庭
3. 戦没者 10庭
4. 井谷正命 10庭
5. 武左衛門 10庭
(休憩)
6. 新 仏 10庭 (これは一年間の内に
亡くなった人、一人一人に
対しておこなう)
7. 餓鬼念仏 5庭

以上がお盆であげられる念仏の順番と回数で
ある。孟蘭盆にあたる地藏供養も、基本的には
お盆であげられる念仏と同様の所作をもってお
こなわれる。ただし、孟蘭盆においては、若干
の違いも見られる。図1はお盆におこなわれる
念仏の順番を図式化したものである。孟蘭盆の
時には、最初の道行きが省略され、庭念仏から
始まるという特徴をもっている。つまり、図の
中の2、3という順番で進んでいくのである。

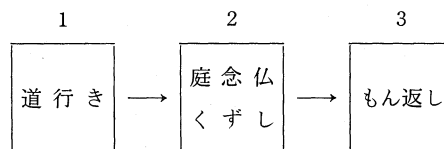


図1 庭念仏の構造

さて、平成7年8月24日の事例では、これま
でにない変化が起こった。それは、先に触れた

ように、この念仏が六地藏の他に武左衛門にもあげられたからである。それ以前までは、六地藏だけを法要の対象としていた。そのため、これまでは25庭の念仏をあげていたが、今回に限っては、六地藏に15庭、武左衛門に10庭を唱えたのである。このような変化が起こったのは、念仏に詳しいK氏が急用で東京に出向いており、念仏のあげ方を間違えたという事であった。また、このような間違いを引き起こした原因は、この相撲が「六地藏奉納相撲武左衛門相撲大会」という名称を2年ほど前から使うようになり、そのため、本来は六地藏に対してのみあげられていた念仏が、武左衛門に対してもあげられるようになった為の変化にともなうものであったのである。

しかし、いずれにしてもここでおこなわれる念仏は、地藏供養のためのものではあるが、念仏の中身からして、ある種の葬送儀礼的な意味を持っていることが理解できる。そして、その中に組み込まれている奉納相撲は葬送と関係を持つ相撲であると考えることができるのである。さらに、この奉納相撲において「子供による33結びの相撲を奉納する」という伝承は、少なくとも六地藏尊に対しておこなわれてきた行為であり、地藏供養と奉納相撲が一對の関係にあることを物語っていると理解することができるのである。

3. 瀬戸町神崎の「番匠相撲」

1) 調査地概況

瀬戸町は愛媛県の西南端佐多半島のほぼ中央部に位置しており、東は伊万町、西は三崎町に接し、その間は11キロにわたっているが、南北は4キロ程度で、南は太平洋に、北は瀬戸内海に面している。そのため平坦な土地は少なく、

山地が80パーセント以上を占めている。

人口については、平成7年7月の時点で2991人（男1377人、女1614人）で世帯数が1185戸である。対象となる神崎地区は、134人（男60人、女74人）で世帯数が69戸である。人口の推移をみると高度経済成長期に入った昭和30年代以降から40年代後半までは急激な人口流出が起きている。昭和45（1970）年には過疎指定町村の仲間入りをしているのである。

歴史的には、交通の便が悪かったことから孤立状態にあり、さまざまな面で情報に乏しい地域でもあった。

神崎の地域的な組織をみると、三つの地域区分が基になっている。上目、中目、下目という区分は、昔ながらのもので、各目には戦時中につくられたという常会が2組づつある。さらに、各常会の下には、十人組の組織が存在する（表1）。

2) 「番匠相撲」の概要

神崎の「番匠相撲」は、旧暦の3月14日に毎年おこなわれてきた。近年では、住民が参加しやすいようにという配慮から、本来の日程の前後の日曜日に設定されている。現在、番匠相撲は子供を中心とした、いわゆる「子供相撲」の形を取って続けられてきている。

番匠相撲は、県立自然公園の指定を受けている番匠鼻の突端に、海を望む形で安置されている地藏尊を供養するためとされており、この地藏尊については『瀬戸町誌』に「大瀬の地藏様」として以下のような説明がされている¹⁴⁾。

「景勝の地、神崎番匠鼻の海岸に、天明2年（1782）ごろの建立といわれるお地藏さんが祀られております。その20メートルほど沖に大瀬と呼ばれる瀬があり、附近に高瀬、牛轡の瀬などの瀬と朝流の変化も激しく航海の難所とされており、船舶の遭難もたびたびだったとか、そのため、海上安全と現在は無病息災も願って建立されたものでしょう。地区の人たちの信仰も厚く毎年3月14日には200メートルほど上の番

表1 神崎の社会的組織

目	上 目		中 目		下 目	
常 会	1 常会	2 常会	3 常会	4 常会	5 常会	6 常会
十人組	2	2	1	2	2	2

匠鼻広場へその地藏さんを抱き上げて供養の相撲が催されている。ところが昭和40年ごろ若者も都会に出て相撲を取る青年もおらず中止したところ、その年、その相撲場附近の広場で牛が3頭も死ぬ今までにない事故が起こり村人は心配し、特に牛組合の人たちは『これはいけない。』と相撲を再開し、地藏様を供養して現在に至っている。

このお地藏さんに命を助けられた漁船や船員など多くの実話もある。」

この説明からすると地藏尊が建立されるきっかけとなったのは、番匠鼻の海岸部において海難事故が頻発したと深い関係のあることが推測される。そこで、番匠鼻沿岸にまつわる口頭伝承を繙いてみると、この周辺は昔から海難事故の多発地帯であったことを窺い知ることができる¹⁵⁾。

「昔、ある激浪逆巻く大時化の日の夕暮れであった、一隻の船が激浪に押し流され、番匠鼻で遭難した。もちろん乗組員たちは海の藻屑と消え去ったのである。その後番匠鼻の近くを通る船は風波もないのに強く流されたり、櫓が折れたりして遭難することが多くなった。その上時化した日の夕暮れ時にはきまったように、火の玉がとびかい、水死者の亡霊や幽霊船が出没するようになった。村人たちは、『番匠鼻にはミサキがいる』といっておそれて、番匠鼻の近くでは漁もしなくなったと言いつたえられている。

いつのころかミサキの霊を慰めるために番匠鼻の突端の森の中に高さ約1.5メートル幅約1メートルの供養碑が建てられた。村人たちはこの碑を7人ミサキとか7人供養とか呼ぶようになったそうである。」

このような事情からして、番匠鼻に安置されている地藏尊は上記の引用にある供養碑と同様に遭難者の供養と海上の安全祈願のために建立されたわけである。加えて、近年になって、相撲行事を継続することが「守護される」とする

考え方が転じて「無病息災」という意味を持つようになった。

(1) 現在の番匠相撲

さて、このような意味を持つ地藏尊と関係する相撲が、どのように取られてきたのかを平成8年4月28日に実施された番匠相撲の事例からその全体像を見ていくことにしよう。

番匠相撲の準備は、その大半が当日におこなわれる。早朝、8時頃から、地区の集会所には、区長、副区長、収入役、十人組長の計14人が集まり、加えて、区長が特別に協力をお願いした若干名の人々も手伝いに加わる。さらに相撲が始まったときに配られる、お赤飯の力飯を準備するために婦人会も手伝いに参加する。作業は土俵作りと、梵天作りの二手に分かれる。

男性たちは、2、3人が、相撲会場となる番匠鼻の駐車場に土俵を切りに行く。現在、土俵は駐車場の端に作られるが、最初に、アスファルトで舗装されている部分から、その切れ目の土の部分までに畳を敷き詰め、次に、その上に藁を束にしたものをつなぎ合わせ、丸い円を作る。これが土俵になる。土俵の大きさの基準はないが、とりあえず、小学生が相撲の取れるくらいの大きさに設定されている。土俵ができあがると、準備にあたった中の1人が一升瓶の栓を抜き、酒を土俵の周りに撒き、清めをおこなうのである。また、地藏尊を安置する場所の周りには、紅白の幕が張られる。その準備が済むと、地藏尊を迎えに2人が連れ添って番匠鼻の突端まで行き、地藏尊を抱き抱えて、会場まで移動させるのである。移動の途中に地藏尊を地面の上におくことはタブーとされ、手渡しによって持ち手は交代することもある。地藏尊が会場まで運ばれることによって全ての準備は終了する。

一方、土俵づくりと並行して、集会所では梵天づくりがおこなわれる。集会所の斜め前の山から竹を切り出し、枝を落とした後に、60センチ位の長さに切り、それに縦から切り込みを入れて、半紙によって作られた下がりを含んだあ

とに水引を縛り付けるのである。このように作られる梵天は昔からの言い伝えに従い、少なくとも36本以上作られる(写真7参照)。

また、相撲大会が終わった後に続けておこなわれる「カラオケ大会」¹⁶⁾のための機械も車に乗せ、運搬可能な状況にする。ほぼ準備が終わるのは、11時頃で、人々は一旦帰宅し、12時過ぎにまた集合する。12時30分頃になると、先に準備を担当した人々は、また集会所に集まり、すでに準備したものを自動車に積み込み、会場へと向かう。

12時過ぎから徐々に地蔵尊の前に人が集まり、12時30分には10人近い女性たちが中心となって「御詠歌」が詠われる(写真8参照)。この人達は「御詠歌組」と呼ばれ、現在、男性1名を含む11名がこの組に入っている。御詠歌は、1時頃まで詠われ、その頃には、区の大半の人々が会場に集まる。会場にきた人々は、必ず最初に地蔵尊にお祈りをし、その後、自分たちの席を確保する。

1時になると、子供たちによる相撲が開始される(写真9参照)。相撲は小学生によって取られるが、4年生ないし5年生よりも下の学年が中心となる。試合は、顔見せから始まり、3人抜きなども実施される。36本以上作られた梵天は、後半になると勝ち負けに関係なく、両者に渡され、この梵天が無くなった時点で、相撲大会は終了する。

相撲大会は、小一時間おこなわれるが、これが終了すると、区で用意した力飯とビールや酒なども配られ、一旦休憩に入る。その間、カラオケのための機械が設置され、準備が整うと、カラオケ大会が始まる。最初は、神崎の中でカラオケを練習しているグループが中心となって歌うことになるが、そのうちに、各常会順にマイクが回され、歌いたい者が次々に歌い始める。このカラオケ大会も1時間半くらいで終了し、4時近くには後かたづけが始まる。会場の片づけが終わる頃を見計らって、午前中と同様に2人が連れだって地蔵尊を元の場所まで運び、安置するのである(写真10, 11参照)。

また、会場にあった荷物は、準備にあたった役員を中心に集会所まで運ばれ、その後、直会が集会所でおこなわれる。

(2) 昭和30年代から40年代の番匠相撲

このように、現在、番匠相撲の運営は、区が主体となって進められるが、今のような体制となったのは、昭和40年代後半からである。それまでは青年団によってこの行事は運営されていた。しかし、青年の減少によって実質的な運営が不可能になったことにともない、先の引用にもみられるように、この行事は中断されることになった。しかし、そこで起こった事件によって、区が運営を引き継ぐことになったのである。そこで、昭和30年代から40年代におこなわれていた当時の番匠相撲を再現することにしたい。

行事は旧暦の3月14日に必ず実施され、現在のように、この日に近い日曜日に変更されることはなかった。当日、夜明けに「小走り」が区内を回り、番匠相撲がおこなわれることをふれ回った。梵天や力飯にかかる準備資金は、青年団の「団費」によってまかなわれた。会場は、現在の駐車場よりも番匠鼻寄りの草むらに作られた。そのため、団員は早朝より草刈りと土俵作りに励んだという。地蔵尊は、土俵を見おろす丘の上に石の敷かれた所定の位置があり、そこに安置された。地蔵尊の運び手は、19歳の厄年を迎えた青年が担当したが、彼らは前日に女性との関係を持つことはタブーとされた。また、上目にあるA家にあった300巻の般若心経を入れた棺を19歳になった2人の男性が地蔵尊の安置された場所まで運んだ。8時ないし9時には、G氏が地蔵尊の前に座り、運ばれた般若心経の教典を一冊一冊開きながら念仏を唱え始める。神崎の人々は、午前中から徐々に集まり、最初に地蔵尊にお参りをしたあと、G氏にこの教典で肩や背中を叩いてもらった。これが終わると、相撲観戦ができるような場所を探し、持参したお弁当を食べながら、相撲の開始を待つのである。

相撲は昼から始められるが、神崎以外にも近

ていた。それを息子であるbとcに半分づつ分け与え、その内のc所有の教典が地藏尊の前で開かれることになったのである。cが亡くなった後、彼の妻であるdが引き継いだ。その後、彼女の子供たちにはこれを継承せず、地藏信仰の信仰者であったfに、そしてfの亡き後は、gに引き継がれることになった。また、このような奉仕をしていた人たちは、神崎内にある寺の住職や寺総代という立場ではなく、まったくの民間の信仰者であった。つまり、地藏尊の前で特定の人物が念仏を唱える行為は、昔からの習俗ではない可能性が非常に高いのである。このことからすると地藏尊と最も古くからのつながりを持つのは、現存する限りにおいて相撲ということになるわけで、地藏尊と相撲の結びつきは切り離せない関係にあったと考えられる。地藏尊に奉納される相撲は、海上で遭難した人々の霊を癒すためにおこなわれてきた行事であったと理解できるのである。

結語—地蔵信仰と相撲

本稿で取り上げた2つの事例が、いわゆる葬
礼相撲の範疇に含まれるのかという点について
これまでの検討に若干の私見を加えまとめてお
きたい。

本稿で取り上げた2つの事例は、いずれも地

蔵信仰と関わる相撲大会であった。

そこで、地蔵信仰の歴史を概観すると、日本では平安末期から貴族社会でこの信仰が広まり、そこでは死者が冥途におもむいて地獄の閻魔の裁きを受けてひどく苦しむのを救うものと考えられていた。中世になって、冥界へいく者を救うと捉えられるようになり、地蔵は阿弥陀信仰あるいは浄土信仰と結びつきながら、庶民の間に広まっていったのである。¹⁷⁾

さて、ここで注目されることは、地蔵信仰が貴族社会の中で始められ、それが庶民の間にしだいに浸透していったという歴史を持っている点にある。日本における葬礼相撲もその担い手は特別な地位の人々であり、いわゆる宮廷文化的な習俗としておこなわれていたからである。時代的な隔りがあるにせよ、このような特定の社会階層によって担われてきた葬送儀礼と地蔵信仰は、死者の霊を弔うことでは一致しており、その両者において相撲が関わっていたことは興味深い。

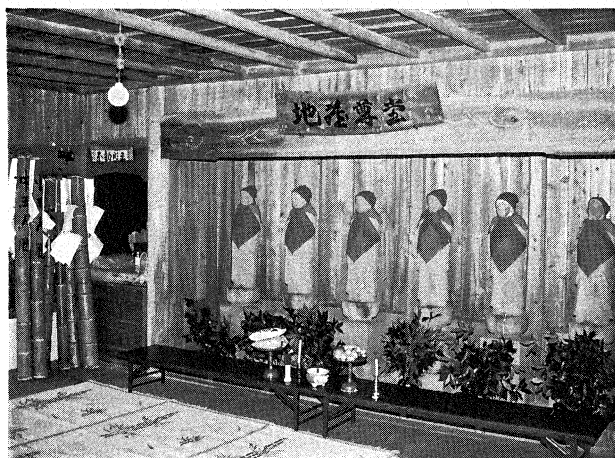
権力者階級の中で続けられてきた葬礼相撲は、5世紀以降にその存在が確認できなくなるが、10世紀以降になって貴族社会で始まった地蔵信仰の中にみられるようになり、その後、この信仰は庶民の間に広まることによって葬礼的な意味を持つ相撲も必然的に取り入れられることになったとする仮説も成立する可能性が出てくるからである。

しかし、いずれにしても地蔵供養のために奉納される相撲の一部には、葬礼的な意味を持つ相撲が存在していることも確かなのである。

注および引用参考文献

- 1) 民俗学関係の学者を中心とする意見では、相撲は豊穡儀礼との関わりが強く、その証拠は、今でも各地で見られるさまざまな伝承相撲や神事相撲であると説明されてきた。
- 2) 相撲が葬送儀礼と関わっていたとする理解は、特に考古学の成果が先行してきた。
- 3) 寒川恒夫1989「相撲のルーツを探る」『超プロレス主義』(別冊宝島99)JICC 出版局。pp. 249-254

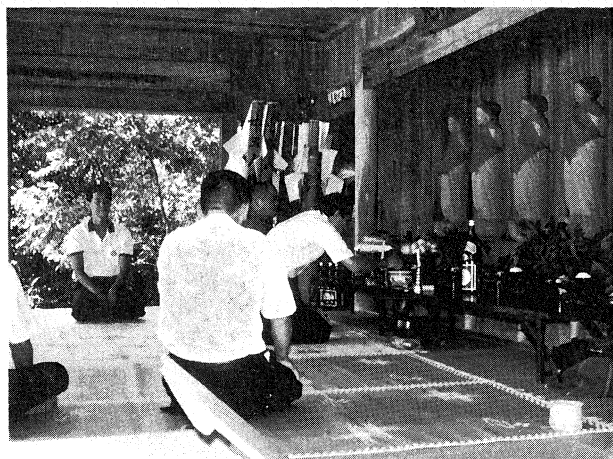
- 4) 大林太良編1974『シンポジウム日本の神話4 日向神話』学生社。p.156
- 5) 寒川恒夫による葬礼相撲の研究成果は、前掲書(寒川1989)も含めて以下のものがあげられる。
寒川恒夫1987「古代人の遊びの系譜」大林太良編『日本の古代13 心のなかの宇宙』中央公論社。pp.313-332
寒川恒夫1993「相撲の起源と天皇」寒川編著『相撲の宇宙論』平凡社。pp.16-55
寒川恒夫1995「相撲の人類学」寒川編著『相撲の人類学』大修館書店。pp.9-55
- 6) 本稿では、これ以外に長谷川の成果も参考にした。
長谷川明1993『相撲の誕生』新潮社。
- 7) ここでは主として寒川1955を参考にした。
- 8) 寒川1995。p.27
- 9) 宇佐美隆憲1995「相撲伝承からみた中国・トン族の相撲」稲垣・谷釜編著『スポーツ史講義』大修館書店。pp.170-174
- 10) カール・モイリ(大林太良解説、寒川恒夫訳)1974「オリュムピア競技の起源1」『えとのす』第1号。pp.95-102
カール・モイリ(寒川恒夫訳)1974「オリュムピア競技の起源2」『えとのす』第2号。pp.152-157
KARL MEULI 1941 *Der Ursprung der Olympischen Spiele*, in; *Antike*, 17. pp.189-208.
- 11) 日吉村誌編集委員会1993『日吉村誌』。p.102
- 12) これは大正3年生まれの人氏書いたメモによる。
- 13) 念仏に関しては、現在でもここに示したとおりの回数がおこなわれており、お盆の時期には、鐘と太鼓は、交代しながら丸一日かけておこなわれる。
- 14) 瀬戸町誌編集委員会1986『瀬戸町誌』。p.903
- 15) 同上書。p.1006
- 16) カラオケ大会がおこなわれるようになったのは、ここ数年前のことである。神崎全体が高齢化しているため、相撲以外の楽しみ方として、みんなが参加できるカラオケ大会がおこなわれるようになった。
- 17) 各地の地蔵信仰については、以下の文献を参照している。
大島建彦編1992『民間の地蔵信仰』北辰堂。
速水侑1975『地蔵信仰』塙新書。



1. 六地藏尊（左に見えるのは梵天）



2. 庭念仏



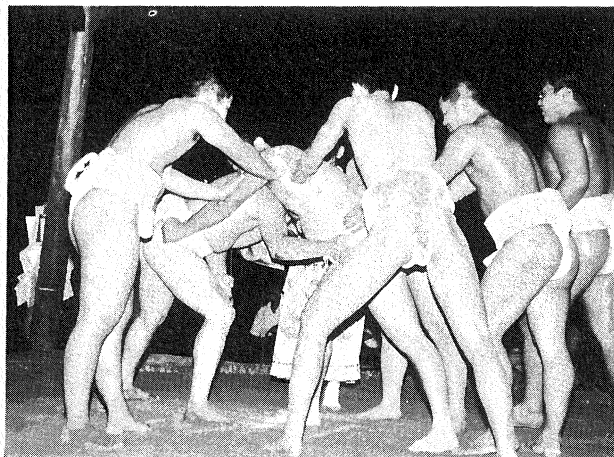
3. 六地藏への焼香



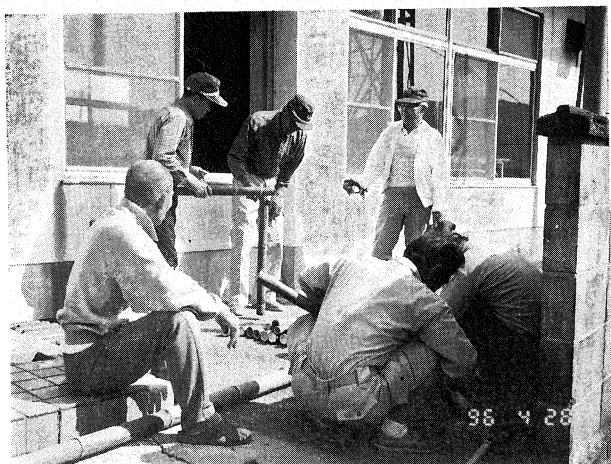
4. 子供相撲（勝者には梵天が渡される）



5. 酒と力飯の交換



6. 最後におこなわれる止めの相撲



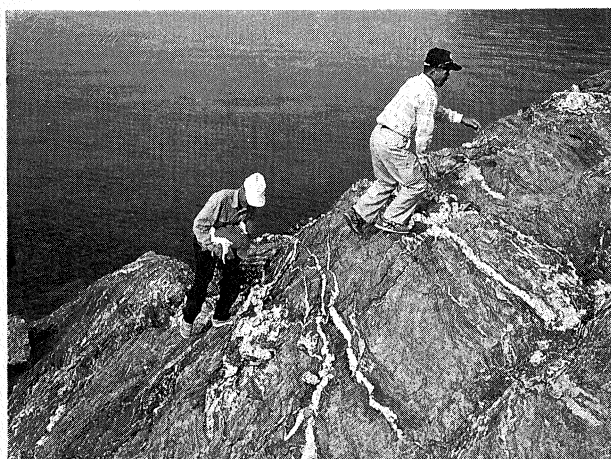
7. 梵天づくり



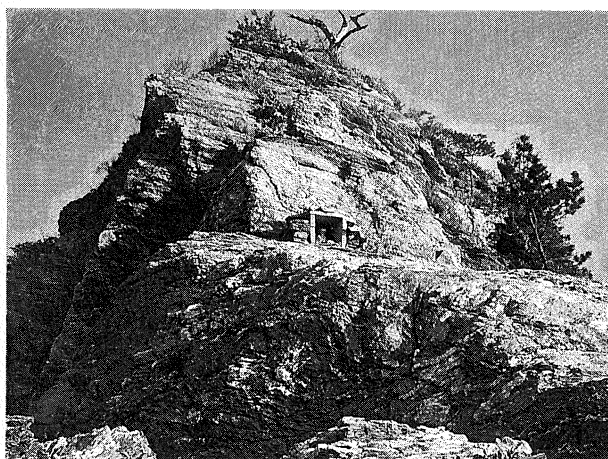
8. 御詠歌による地藏供養



9. 番匠相撲（現在は子供相撲）



10. 地蔵の移動



11. 地蔵尊堂